

特集 コミュニティを育むボランティア・市民活動の可能性

『広がれボランティアの輪』連絡会議(会長:阿部志郎/横須賀基督教社会館館長)では、ボランティア活動に対する社会的支援策のあり方等の提言活動を毎年行っており、昨年12月6日、一昨年に引き続き「コミュニティの再考」をテーマに「提言」を発表しました。その「提言」をもとに、「コミュニティ再考～新たな社会のあり方を模索して」と題したシンポジウムを開催し、具体的な事例を通してコミュニティを育むボランティア・市民活動の可能性について検討しています。

本稿では「提言」及びシンポジウムの中から、大人だけでなく子どもともに参画して進めるまちづくりと、ホームレスの人々の自立支援を通して商店街を中心にまちの活性化をめざす事例を紹介し、これからのまちづくりにおけるボランティア・市民活動の可能性について考えます。

「魅力ある未来のまち」を子どもたちが創る

まちづくり倶楽部(青森県むつ市)

町を探検し、ワークショップでアイデアを具体化

本州最北端「下北半島」の中心に位置する「むつ市」は、日本で初めての「ひらがなの市」として、昭和34年に旧大湊町と旧田名部町が合併してできた人口約5万人の緑豊かな町。

平成10年4月に発足した「まちづくり倶楽部」は、無作為なまちづくりに危機感を感じた地元の建築設計関係に関わる6名が集まって設立したVグループである。

同倶楽部では、“市街地の活性化”“公園づくり”“ごみ問題”“市町村合併”“ネットワークづくり”など、“6つの柱”を掲げて活動を行っている。全ての取り組みに共通しているのが、「まち歩き」をしながら現場の課題を発見し、ワークショップを通じてアイデアを出し合い、具体化していく手法をとっていること。

また、「自分たちのまちは自分自身でつくっていく」をモットーに、地域の大人だけでなく「子ども」もともに参画する、市民参加によるまちづくりを進めているのも大きな特徴である。

その他、発足後3年目に、市民一人ひとりの「助け合い」をより目に見えるものとするために、地域通貨「結」を流通させ、助け合いの循環をつくる「まちづくり銀行」を創設。小学校や地域の様々なイベントなどで実験的な取り組みを行っており、同倶楽部では「助け合い」のネットワークが地域の中に根付くよう期待を寄せている。

子どもたちのアイデアを行政へ提案

「まち歩き」の基本となるのが「わが街探検隊」による取材・調査活動で、ポラロイドカメラを抱え、いろいろな角度から街の様子を撮影し、ワークショップでの資料として活用している。

例えば、「車いすから見た大湊」では、車いすで移動しながら大湊駅やその周辺のバリアフリー度をチェック。その後のワークショップでは、模造紙に写真を貼り込み、街の良い点・改善すべき所をピックアップ。意見発表では、探索中に車にクラクションを鳴らされ「心のバリアフリー」に気がさせられたり、「駅待合室に図書館を」という意見が出るなど、自分が住む街をより魅力的にし、愛着を持つきっかけとなるプログラムとなった。

一方、延べ5回を数えた「代官山公園を創ってみよう」というワークショップでは、小学生から高齢者までが参加。大人チームと小学生チームに分かれ、アイデア出しから提案コンペ、取りまとめを経て、それぞれ公園の敷地平面図に、具体的な模型を配



自分で撮った写真を整理し、アイデアをまとめます

車いすで道路をチェック

置していった。小学生チームでは喜々として、遊具や動物、展望台やカフェテラスなどをのせていく作業を行い、自分たちの夢とアイデア満載の公園イメージを膨らませていった。

また両チームとも、スロープや出入口等の『アクセス』、代官所跡らしく『関所』や街を見晴らせる『展望台』の設置などを盛り込んであり、世代を超えて多くの共通点を示すものとなった。

こうしたアイデアは、メンバーやワークショップ参加者との共有からさらに広がり、行政や議会への提案へと発展。実際に同倶楽部が提出したアイデアの一つは、むつ市の「中心市街地の基本計画」に盛り込まれており、近い将来、子どもたちの夢が具体的な形となって現れる日が来るかもしれない。



まちづくりは“人のため”ならず
まちづくり倶楽部・代表 工藤知彦さん

有志6名で始めた本倶楽部も、年4～5回程度実施するワークショップを通して、次々とボランティア精神旺盛な人々と出会い、つながり、現在では約50名のサポーターが集まっています。サポーターは、まち歩きやワークショップなどに積極的に参加していただける知恵出しメンバーです。実際のワークショップでは、私たちコアメンバーが「テーブルマナージャー」として、子どもたちが大人に気後れせず発言できるよう座席の位置を工夫したり、司会進行を行っています。

活動当初は、「まちづくり倶楽部の提案は夢物語だ」などと言われたこともありましたが、総合的な学習の時間を利用してプログラムにチャレンジしていただける小学校も出てきたり、行政職員がワークショップに参加するようになるなど、少しずつではありますが、市民主体のまちづくりに向けた機運が高まってきたように思います。

まちづくりは“人のため”ならず。つまり、自分のまちを良くするのは自分自身であり、それはいつか巡り巡って自分に帰ってきます。昔はあったコミュニティを無くしてしまったのは私たち大人です。失ったコミュニティを再生するために、今後も多くの方たちの関心を集めるプログラムを企画しながら、参加の輪を広げていきたいと考えています。

ホームレスの人々の自立・生活支援は、まちの活性化につながる

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会(東京都台東区)

ホームレスの人々への多様な自立支援を展開

日本が高度経済成長に湧いた1960年代、荒川区南千住から台東区浅草に向かう目黒橋付近一帯に日雇い労働者のための簡易宿泊所が次々と建てられた。それが一般に「山谷」と呼ばれる地域で、上野公園や隅田川遊歩道など、台東区内には約5,000人のホームレスの人々がいると言われている。

平成2年、Vグループとして誕生した「ふるさとの会」は、高齢化し職を失ったホームレスの仲間への炊き出しや福祉相談、娯楽活動を中心とした活動をスタート。その後、おりからの不況によって、ホームレスの人々が急増する中で、生活保護受給者を対象とした居場所づくりとなる「共同リビング」プログラムを開始。平成11年にはNPO法人格を取得し、より専門性の高い事業を展開している。

現在、ホームレスで疾病を抱える男性高齢者等が地域で自立するための中間通過施設、DVなどが原因でホームレスとなった单身女性を対象とする宿泊施設、要介護のホームレスの人々が介護サービスを利用できる生活施設、就労意欲のある男性の自立をめざしつつ、生活や就労の訓練を受けながら生活する施設の運営などを行っている。

商店街と共同でコミュニティづくり

このように多様な事業を展開している「ふるさとの会」にとって、「いろは会商店街」との共同事業は、コミュニティづくりの新たな可能性を秘めた取り組みとなった。

山谷地区にほど近い同商店街は、約100軒の商店で賑わった以前の活気を失いシャッター街と化している。日雇い労働者はかつては商店街でお酒や惣菜などを買って「良きお客」だったが、バブル崩壊後、アーケードで結ばれた商店街に寝泊まりするホームレスの人々が増え、商店主にとっては「汚く、迷惑な」存在へと変化していった。

「ふるさとの会」は自立支援プログラムの一環として、商店街にヘルパーステーションを開設しているが、ホームレス支援そのものに疑問を抱く商店主も少なくなく、ホームレス支援を通じた「地域再生」の可能性をねばり強く訴えていった。

こうして昨年4月、商店街と共同で「いろは会商店街をよくする会」を発足。ホームレス自作の「花プランター」を商店街に設



焼きそば作りに大忙し!

置するとともに、シャッターペイントや清掃活動などを始めた。これらの製作・維持管理等は全て「ふるさとの会」の「雇用」として行われているほか、会のメンバーとともにホームレスの人々に声かけ(アウトリーチ活動)を行う商店街の方々も増え、それがきっかけで自立への道を歩み出すケースも見られるようになった。

大盛況の商店街イベント

「いろは会商店街をよくする会」の第一段階の終着点で、昨年11月22日に実施された「いろは祭り」。

商店街を舞台に、ジャズコンサートや太鼓演奏、獅子舞などが繰り広げられたほか、縁日やバザーなどが催された当日は、ホームレスの人々もVスタッフとして大活躍。延べ500人を超える人々が訪れ祭りを楽しんだが、これほどの賑わいは十数年振りの出来事だったという。このイベント成功をきっかけにどのようなコミュニティづくりが進むのか、試みはまだ始まったばかりだ。



思わず立ち止まって、女獅子舞に見入る皆さん



ホームレス問題は、福祉のまちづくりへとつながっています

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会・理事長 水田 恵さん

現在、山谷に暮らすホームレスの人々は2つのタイプに大別できます。一つは、かつて「金の卵」と呼ばれ、東北から上野駅にやって来られた、高度経済成長期に製造業などを支えた方々。もう一つは、リストラで失職した方々で、ホームレスの約7割を占めています。どちらにせよ50歳代後半で、10代～20代の若者の親父さん世代がホームレスになっているという現実があります。

ふるさとの会では、彼らがもう一度社会の中で誇りを持って、役割を担って生きていけるようにするために、様々な自立に向けた取り組みを継続して行っていますが、ホームレスの人々を地域が迎え入れるためには、多様な価値観を受け入れられる社会やコミュニティをつくりあげることが必要です。

昨年11月に開催した「いろは祭り」を例にとれば、まず私たち自身が商店街に店を構え、コミュニティに入っていく。そのうえで、商店街の皆さんにお話させていただいたのは、ホームレスの人々を排除するのではなく、「受け皿」となっていただくため。つまり、ホームレス支援に対する行政の公的資金を団体として得て、団体の購買力として地域に還元するという提案で、これはNPOだからこそ担える役割だと信じ、今後も粘り強く訴えていきたいと考えています。

いつかは誰もが職を退き、やがて高齢者になっていく。少子高齢化社会を迎えた今、ホームレス問題は決して特殊な問題ではなく、福祉のまちづくりを見据えた共生のまちづくりへとつながっているのです。

特集 コミュニティを育むボランティア・市民活動の可能性

『広がれボランティアの輪』連絡会議(会長:阿部志郎/横須賀基督教社会館館長)では、ボランティア活動に対する社会的支援策のあり方等の提言活動を毎年行っており、昨年12月6日、一昨年に引き続き「コミュニティの再考」をテーマに「提言」を発表しました。その「提言」をもとに、「コミュニティ再考～新たな社会のあり方を模索して」と題したシンポジウムを開催し、具体的な事例を通してコミュニティを育むボランティア・市民活動の可能性について検討しています。

本稿では「提言」及びシンポジウムの中から、大人だけでなく子どもともに参画して進めるまちづくりと、ホームレスの人々の自立支援を通して商店街を中心にまちの活性化をめざす事例を紹介し、これからのまちづくりにおけるボランティア・市民活動の可能性について考えます。

「魅力ある未来のまち」を子どもたちが創る

まちづくり倶楽部(青森県むつ市)

町を探検し、ワークショップでアイデアを具体化

本州最北端「下北半島」の中心に位置する「むつ市」は、日本で初めての「ひらがなの市」として、昭和34年に旧大湊町と旧田名部町が合併してできた人口約5万人の緑豊かな町。

平成10年4月に発足した「まちづくり倶楽部」は、無作為なまちづくりに危機感を感じた地元の建築設計関係に関わる6名が集まって設立したVグループである。

同倶楽部では、“市街地の活性化”“公園づくり”“ごみ問題”“市町村合併”“ネットワークづくり”など、“6つの柱”を掲げて活動を行っている。全ての取り組みに共通しているのが、「まち歩き」をしながら現場の課題を発見し、ワークショップを通じてアイデアを出し合い、具体化していく手法をとっていること。

また、「自分たちのまちは自分自身でつくっていく」をモットーに、地域の大人だけでなく「子ども」もともに参画する、市民参加によるまちづくりを進めているのも大きな特徴である。

その他、発足後3年目に、市民一人ひとりの「助け合い」をより目に見えるものとするために、地域通貨「結」を流通させ、助け合いの循環をつくる「まちづくり銀行」を創設。小学校や地域の様々なイベントなどで実験的な取り組みを行っており、同倶楽部では「助け合い」のネットワークが地域の中に根付くよう期待を寄せている。

子どもたちのアイデアを行政へ提案

「まち歩き」の基本となるのが「わが街探検隊」による取材・調査活動で、ポラロイドカメラを抱え、いろいろな角度から街の様子を撮影し、ワークショップでの資料として活用している。

例えば、「車いすから見た大湊」では、車いすですりながら大湊駅やその周辺のバリアフリー度をチェック。その後のワークショップでは、模造紙に写真を貼り込み、街の良い点・改善すべき所をピックアップ。意見発表では、探索中に車にクラクションを鳴らされ「心のバリアフリー」に気がさせられたり、「駅待合室に図書館を」という意見が出るなど、自分が住む街をより魅力的にし、愛着を持つきっかけとなるプログラムとなった。

一方、延べ5回を数えた「代官山公園を創ってみよう」というワークショップでは、小学生から高齢者までが参加。大人チームと小学生チームに分かれ、アイデア出しから提案コンペ、取りまとめを経て、それぞれ公園の敷地平面図に、具体的な模型を配



自分で撮った写真を整理し、アイデアをまとめます

車いすですり道をチェック

置していった。小学生チームでは喜々として、遊具や動物、展望台やカフェテラスなどをのせていく作業を行い、自分たちの夢とアイデア満載の公園イメージを膨らませていった。

また両チームとも、スロープや出入口等の『アクセス』、代官所跡らしく『関所』や街を見晴らせる『展望台』の設置などを盛り込んであり、世代を超えて多くの共通点を示すものとなった。

こうしたアイデアは、メンバーやワークショップ参加者との共有からさらに広がり、行政や議会への提案へと発展。実際に同倶楽部が提出したアイデアの一つは、むつ市の「中心市街地の基本計画」に盛り込まれており、近い将来、子どもたちの夢が具体的な形となって現れる日が来るかもしれない。



まちづくりは“人のため”ならず
まちづくり倶楽部・代表 工藤知彦さん

有志6名で始めた本倶楽部も、年4～5回程度実施するワークショップを通して、次々とボランティア精神旺盛な人々と出会い、つながり、現在では約50名のサポーターが集まっています。サポーターは、まち歩きやワークショップなどに積極的に参加していただける知恵出しメンバーです。実際のワークショップでは、私たちコアメンバーが「テーブルマナージャー」として、子どもたちが大人に気後れせず発言できるよう座席の位置を工夫したり、司会進行を行っています。

活動当初は、「まちづくり倶楽部の提案は夢物語だ」などと言われたこともありましたが、総合的な学習の時間を利用してプログラムにチャレンジしていただける小学校も出てきたり、行政職員がワークショップに参加するようになるなど、少しずつではありますが、市民主体のまちづくりに向けた機運が高まってきたように思います。

まちづくりは“人のため”ならず。つまり、自分のまちを良くするのは自分自身であり、それはいつか巡り巡って自分に帰ってきます。昔はあったコミュニティを無くしてしまったのは私たち大人です。失ったコミュニティを再生するために、今後も多くの方たちの関心を集めるプログラムを企画しながら、参加の輪を広げていきたいと考えています。

ホームレスの人々の自立・生活支援は、まちの活性化につながる

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会(東京都台東区)

ホームレスの人々への多様な自立支援を展開

日本が高度経済成長に湧いた1960年代、荒川区南千住から台東区浅草に向かう目黒橋付近一帯に日雇い労働者のための簡易宿泊所が次々と建てられた。それが一般に「山谷」と呼ばれる地域で、上野公園や隅田川遊歩道など、台東区内には約5,000人のホームレスの人々がいると言われている。

平成2年、Vグループとして誕生した「ふるさとの会」は、高齢化し職を失ったホームレスの仲間への炊き出しや福祉相談、娯楽活動を中心とした活動をスタート。その後、おりからの不況によって、ホームレスの人々が急増する中で、生活保護受給者を対象とした居場所づくりとなる「共同リビング」プログラムを開始。平成11年にはNPO法人格を取得し、より専門性の高い事業を展開している。

現在、ホームレスで疾病を抱える男性高齢者等が地域で自立するための中間通過施設、DVなどが原因でホームレスとなった单身女性を対象とする宿泊施設、要介護のホームレスの人々が介護サービスを利用できる生活施設、就労意欲のある男性の自立をめざしつつ、生活や就労の訓練を受けながら生活する施設の運営などを行っている。

商店街と共同でコミュニティづくり

このように多様な事業を展開している「ふるさとの会」にとって、「いろは会商店街」との共同事業は、コミュニティづくりの新たな可能性を秘めた取り組みとなった。

山谷地区にほど近い同商店街は、約100軒の商店で賑わった以前の活気を失いシャッター街と化している。日雇い労働者はかつては商店街でお酒や惣菜などを買って「良きお客」だったが、バブル崩壊後、アーケードで結ばれた商店街に寝泊まりするホームレスの人々が増え、商店主にとっては「汚く、迷惑な」存在へと変化していった。

「ふるさとの会」は自立支援プログラムの一環として、商店街にヘルパーステーションを開設しているが、ホームレス支援そのものに疑問を抱く商店主も少なくなく、ホームレス支援を通じた「地域再生」の可能性をねばり強く訴えていった。

こうして昨年4月、商店街と共同で「いろは会商店街をよくする会」を発足。ホームレス自作の「花プランター」を商店街に設



焼きそば作りに大忙し!

置するとともに、シャッターペイントや清掃活動などを始めた。これらの製作・維持管理等は全て「ふるさとの会」の「雇用」として行われているほか、会のメンバーとともにホームレスの人々に声かけ(アウトリーチ活動)を行う商店街の方々も増え、それがきっかけで自立への道を歩み出すケースも見られるようになった。

大盛況の商店街イベント

「いろは会商店街をよくする会」の第一段階の終着点で、昨年11月22日に実施された「いろは祭り」。

商店街を舞台に、ジャズコンサートや太鼓演奏、獅子舞などが繰り広げられたほか、縁日やバザーなどが催された当日は、ホームレスの人々もVスタッフとして大活躍。延べ500人を超える人々が訪れ祭りを楽しんだが、これほどの賑わいは十数年振りの出来事だったという。このイベント成功をきっかけにどのようなコミュニティづくりが進むのか、試みはまだ始まったばかりだ。



思わず立ち止まって、女獅子舞に見入る皆さん



ホームレス問題は、福祉のまちづくりへとつながっています

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会・理事長 水田 恵さん

現在、山谷に暮らすホームレスの人々は2つのタイプに大別できます。一つは、かつて「金の卵」と呼ばれ、東北から上野駅にやって来られた、高度経済成長期に製造業などを支えた方々。もう一つは、リストラで失職した方々で、ホームレスの約7割を占めています。どちらにせよ50歳代後半で、10代～20代の若者の親父さん世代がホームレスになっているという現実があります。

ふるさとの会では、彼らがもう一度社会の中で誇りを持って、役割を担って生きていけるようにするために、様々な自立に向けた取り組みを継続して行っていますが、ホームレスの人々を地域が迎え入れるためには、多様な価値観を受け入れられる社会やコミュニティをつくりあげることが必要です。

昨年11月に開催した「いろは祭り」を例にとれば、まず私たち自身が商店街に店を構え、コミュニティに入っていく。そのうえで、商店街の皆さんにお話させていただいたのは、ホームレスの人々を排除するのではなく、「受け皿」となっていただくため。つまり、ホームレス支援に対する行政の公的資金を団体として得て、団体の購買力として地域に還元するという提案で、これはNPOだからこそ担える役割だと信じ、今後も粘り強く訴えていきたいと考えています。

いつかは誰もが職を退き、やがて高齢者になっていく。少子高齢化社会を迎えた今、ホームレス問題は決して特殊な問題ではなく、福祉のまちづくりを見据えた共生のまちづくりへとつながっているのです。